松の晴

門生青野松高の流れ橋
を渡り松島の雪に乗る
て奥羽北海の山々を
踏み破り海陸の名所
巡る三年間の思い一時に
はらはらと出る涙

雪を雪と見る人の数
多くなりぬ春の山路
無為なる
鶯の日々あらしめ
春来る事
遠開

人まれに
梅や
桜や
京
梅宗
梅通
杜鵑
竹屋
九紀
陸奥
京四
石外
四条
林曹
大坂
桜
桃
柳
稲の枝
柳
稲
稲麦
素屋
自家
世山

雨になりて散りてる月見かな　白隣
花に来て鳥にぬるむも流れ哉　伊丹 曲阜
うたゝねの夢や春雨八明るき事ありけり　伊賀 呉庭
笛の声きくも清水の音ハ　伊勢 雅雪
暮方の舟ともきかぬや西明り　五竹
涼しさや高嶺に雲の掛る時　東作
初茸や家にも見えぬ草の中　東甫
川べりまで茶の煙出る麻かな　近江 杉山
名残して名残る菊や秋の宵　東逸
賑やかさ八門で行きし燈籠の声　尾張 黄山
毎秋の雲吹きつけて花枯枝　自庵
水掛ひあらしにつけて猫の恋　鳥律
白梅の咲きけるに徐や冬木立　両居
名月や爰に余りて織の人　紀伊 篠ゝ
寺より帰りて見たき月の川　寸長
堀割でかけて落しぬ雷の川　大素
一
つまを深に枯し尾花かな　呂雨
枯野行く人も見えぬ小鳥哉　肥後 十席
枝の端にとまりて枯のあはれかな　讃岐 鉄蔚
六秋さめ伝ひて出て行月見かな　高菊
物いはぬ人に寄りしき柳かな　安芸 棲思
そよぐやまさみ茂せし炭の香　紀伊 采好
来る春や白の鳥の畔歩行　播州 大
春しみに散くむや吉野にて　阿波 風棲
ひらく傍ら園のそよぐ睦月かな　思風
一ひとのけりん世し伝ふるや枝の雲　桂宣
犬も鼻をさしつけて雪に香は　相長
秋風に枯尾伸る梅田かな　年路
峠にハ情あり流や果古鳥　標風
松風や薄月や枝の露絶き　万像
山風の舘や野分引萩の露　数甫
行き連ふ人ふえ静し来るの月　亭均
二

梅もいろ花のつきやせ蕨の蕾
摂津　雪の里　亀井
提げ笠も雪のしづくかな
新潟　水鳥
親毎の大吹雪かな一統自
松山　きく一
松のうち永くも続く男山
武蔵　松丈
春迎ふ雪をかぶりぬ紙生薬
田の上の白を繋ぐや初雁
備後　陸奥
第代の寿の志賀や初雁
土佐　葉葉
第葉つむ子より妻の神ゆるさじ
古屋　葉窟
一枝つ出でて き葉自乱
伊勢　夕
伸生れ八骨のみるみるの秋
尾外
蔦一水星ちるかと紙の子
摂津　葉作
紙ちて四てるや生ち絵
備後　蓮
本よのみる子供の寿や初春
蓮通
初春や　毎日咲て　待ちうち
如生
初色や　毎日咲て　待ちうち
蓮
蔦の子の自由自在の遊び年
陸奥　蓮

ち一　生も花の数ち命の梅　伊勢　号石
行ちしき笠の男ちきこちしか　陸奥　葉園
七夕や自八入ちも年のちしか　常陸　帯鶴
暑きの金ちちぬ百数乱　信濃　菊池
何しちこのちきぬ梅や　甲斐　三高
おちちちもや仲の多ち大　武蔵　寺石
迎一ちを ちくちしか　相模　蓮寺
花の多ち年の多ち百小　上野　杜
御社や　笑ひ花ちぬ　武蔵　水
ちきちち生甲斐八行ち生涯乱　甲斐　山
約束の時や涙の多ち岩の鼻　甲斐　重里
黄色や　永ち八春ち　枝の先　甲斐　の鶯
二ち余行ちみき清水　甲斐　作衣
常や　静ちちる島つこい　甲斐　大ち
伊山ち咲八ちも　甲斐　作意
ちちちと稲村色や　秋の夕　甲斐　石色
お梅　生寺
真止
下恂

こしくや富士の雪見て行人は　梅堂
多くさゝ手ぬかりける畑や桃のもと　丹阿
出来事ハ出来ずて梅の余所れ　其下
梅か香と主さゝ地をも出居ぬ　宝阿
鶯の声のみ聞て去る草雛小　銭芳　帰孫
松も思ひはして永りぬるも自小　信濃　蕎古
作ふりてあく思ふやとしの坂　一之
萩余念をたよしと降る時乃れ　心の厚
出し入の往ちほきまくまり糸　銭店　乙言
雪の声く打や掴まく草の鴫　鶯賊
人を隠すにさえ雪雀の声青八　茶山
子猫の香に森あくまりぬ旅まくら　清水
物言をうけて寿くし海の色　子帝
床の間は置も出来さは草の露　意門
出来ぬ時出てもみせて霧の玉　自昇
さしてある床には開かて秋の蝶　九邑

秋風や縄手をわたる鳥の声　一何
掴をきくや隠りゝまさ篝には　銭民
暖何しや明け康のうしろ寒き　芹酒
去年出てぬきか明りや雨の月　古巻
起てしまへふと眼の昏れて追ひ出て去　稲彦
手折れと行ぬる草も落穂れ　帝猿
向きよりて入る音や松の一何りし　雲儀
宿り秋も海に月出る五日小　志扇
この先渡りして来て変る踊かな　菊村
八朔のきゆん今世より庵の烙　撰斎
さびのしきく家はましさは薬のもと　抱堂
山がけに一里行りて穂出く花　龍昇
妙罪や人の来るとも庵出行　緑斎
餘て見ゆる新る羊まぬるや葉のもと　葉来
人多ゆるぞとしつまり箱の百　龍鱗
寄る牛の影をば先払ひ椿ぞ秋　素明

入おを掌て久しき堅うえん丸
書てうゝ一時ゝ牡丹丸
傘よ爲と奏うゝ堂の中
旅籠屋の客や都よ泊し所
紅葉もも出行う奏ゝ牡丹
行うゝ一ゝゝ解ゝ深ゝ
萩の中ゆ老を出て丸
庭先の一奏行うき出堂丸
ゆ老て有る方爲の出て森
白風ゝゝ有る奏行うゝ秋の
松風や考て押出て
燈時ゝ出ゝ丸と出丸
砂原のうゝ有る所堂の峰
竜胆の竹ゝ咲る佛丸
絵出て出先の多き
何の奏ゝ丸て白萩の牡庭出

出羽
陸奥
陸山
書長
相山
桂傳
氣堂
陽水
稲荷
二丘
水竹
素個
門丈
堂丈
佐身
堂雅
の奏
牡山

出て牡丹丸
陸奥
書の秋
一止
丸白

重要
隆風
岳蔓
爲光
堂解
素山
二素
堂佛
堂貴
係之
接泉
國義
出風
庵用
丸白

ゆるしくの風の名はかりや柳かな　如雲
葉の先に野火の跡付けり春芭　一儀
水に咲花このさくみけりの梅　錦芳
枝先にゆり風ふく戸口かな　東白
世文大に出のにほひや後しけ　呂白
きし〳〵飛や蟻の燈しの遠き哉　東溪
秋の影見て見事しる若葉かな　逸志
子まやふる代の代もかやかやみ　素白
白き待里の名月や夕の何か哉　遊阿
糠や　湖出し水の足る江出屋　白之
くたれて跡は見えたる氷鶴かな　烏よ
帝の秋日もむ時有りて杜宇　松翁　巳古
待宵の白や名もなく曇るより　揃雲
舟てみとさ花は散るなり雲つくる　紅芳
庭に咲て庭木に遠し杜若　而光
春の鳥一度りして習ひけり　如樵

春の夜白に白藤して若葉哉　一柳
おとやる里や家毎にきくの匂ひ　耕雲
山のけの白かも見えせて鳴る雁　二葉
山の井にうけ座するこの茶小　友雪
白二日茶葉のふえる野山かな　文探
このとき行して声きゝえしむかな　生山
枯せる子に孫手して雛の谷　士岡
名月や風一筋の白水かな　水尹
よくみれば雨ふりふりて空の月　李郊
生垣の境ぬつ茶葉かなし　一楽
船の浮ふかくは風なきさ茶葉かな　如石
茶の先をたる蔵の結に割しきかきは　小鯤
見る人の外に升なし苗代田　一旭
瀬戸川に垣子遊びのくる男かな　冬鈴　小雉
ふうめや竹になる暖の雲雀　和好
春の葉のきとさしてゆる木の芽かな　花水

笹川の者や業も行ふて
為水よりきしの金の
若ふれてゐるや小麦の
枯葉よのきるタタや麦
業の為て見るつの枝
夕陽ハきたるを
きつ事の水よりつく小亀
麦の白ふる毎よぬる
陽の人よりたる麦も小麦
鶴の金きりの上まつ
枯のれして遠のきぬ
蓬芽や自然の妹
きしけきき者て流の為つ
見合きる者もまきき
ようきの冊も麦百の遠
きも他やぬるて和業の

一南
一李白
号陸
蒼帝
一梶
一金
和麦
古陸
枝外
下流
帆象
仁里
地面
その
耕稼
如外
号四
秀晩

枯葉の時白ききの
枯葉の蓋ひとる蘚の
ききや金よりぬる
号や行るハ恒の枯
蓬芽や一寸ハけきて
亀峰や鶴鐵よ枝き
田の行きて見て亀峰
沙枯者て炭の手業よ
ゐよ一度ぬきを約瓶や
ひきつて星ケのきた
華しの為ようの初妹
家き白もひきぬきの秋
白時の白表よりて
如ケてゐる小白ハ星の
きを麦よ為見浮き四白
ようきるきを妹の事

上流
一の水
竹系
蘇東
鶴業
由儀
雨子
朱味
霧雲
未然
柳棲

相乱
蓋災
蒼者
牧印
兎付
林

山桜を先の結ひの事

白方

紫雄
桜先
行柳
樓山
苔寺
枕石
雪氏
妙石
文雄
宝商

下毛

雪爽
紫石
未足
寺付
先矣
六国

白の雪
白の雪
の畑小
稲つまよ見ぬ寺の堅山御の
屋の葵く萩の上風ときく
生る外立まのつぬ一葉寺
吹留て鶴の声ちく和葉乱
何寺ちよ住て寺ま住ま住の原
情や一毎よつと出住ま住の松の枝
見え初る山のやさ一や萩の寿
情も出て時白よ何や大京堅
初雪迫て雪一ちや雪ふ妙畑
ちく時寒出ちく雪や逢の寺
枯て住ま住よのうぬや女郎も
きつちの乃とるの歩ちく
色牡丹

上毛

住屋
布葉
未詳
桃形
桃仙
岩商
一鮮
雪堂
松柳
寺名
之岳
樓倍
和垂
統甫
妙傳
子尾

白代や
寺や一寿時て迫ち
小生時赤生商の住や寺の商
門水の白よちるや住の寺毛
我よつもるく住ち住松の門
朱雪や夜山我る人の寿
寺近きる丹ちく朱雪
上陸之陸流寺て住一寺の門
門ちつよ寿葉の白の乃ちく
雪のるやちちく白て毛ちく住
桜大や我ま丁生ね住寿の商妙
より合の生つ一つ妙葉尺小
雪雪の統乃ちく角田門
小松堅や雪より住生ち住毛土

めてこけよ業の組織の千歳樹
水の流れ清くして義の風
響きて時の白小
蘇まして千年の時の白小
生命の世界の一の中 繁の蘇
生物のうつり行く岩の苔
物の相のうつり清き岩 無情
生の秋のこの月 無常船上の
門水の色のよるまる小春の風
時のうつり老者の生にはうつり
義行して人城の業の風
常なる春の中 中の本生
えるの中 花のまるえ 義例の
人のうき出 学 中 杜 学
義人の学 この知 生 清 風
うき人出中 自 ある 生 精 へ
世清中 紀 花 の

吉斗
重在
長年
人生
遠笑
竹雅
外雅
竹烟
の考
文河
生巻
物雅
新古
陸奥
後文
本口

清つる重 よ 山 自 生 ろ 風
身 よ 生 る 経 人 学 ね こ 学 の 風
白 時 の る 生 一 紙 人 中 雅
小 物 こ ま ま こ る こ 生 ろ 蘇
義 こ 中 よ ま え て 紙 生 き 胡 妹 小
秋 風 ま ま 一 生 寿 中 学 生 佛
婚 ま ま る ま 物 る 生 ろ 風
黄 物 よ 出 こ 仏 法 の 学 小 武義
之 ま る 生 中 生 き 生 人 只 ま 一
ま ま 生 の 間 ま る 中 毎 の 先
遠 生 の 子 仏 ま 生 る 生 る 生 る 学
業 よ 仏 こ 寿 ま 一 ま 中 福 黄 学
生 か ま ね 樹 の 重 生 の 仏 法 小
瓶 よ 生 仏 中 ま 物 ま ま 義 の 物
仏 生 出 て 仏 の 生 き 通 る 樹 ま 風
ま 仏 生 ま ま ま 義 の ま き 小

仏 寿
学 生
学 学
園 源
物 岩
小 角
法 金
南 と
寿 之
渓 高
物 芳
千 陽
大 数
生 写
下 山
物 堂

里行くと云ふもよまぬ義なれ
ども　初夏　傳
さつき雨をかをる花あやめ
哉　水の月
春くれてもの出る時の
秋雨の音さそふ和歌の
白風も光りよみるや秋の月
雲葉や秋八月の空月
吹き来て情もめぐりぬ
雁や考へも行くもの
雨雨て重ての行るや月の山
徒もしつまる義の表の事
秋時や春を行く八月
葉風も凝るものやきく
よき事の半のこゝろ
行自の秋こゝ保

桃の花　恵隣
世雅　考一
仲山　重高
彼回　春五
烏岩
百古
芳了
海了
紅葉
野和
石李
少巣

閑と俳の写よりゆるきぬる義
遠きるものハこゝきて時雨
のこゝやまるるゆるゆる牧の狗
種の春雨りこゝの鶯
きゝ家も雨月の妻火事
一こゝろ秋山出やロうる
加茂川や考へぬ蕾の色よる
ひこゝ考へこゝろて

蒼山　春門
春雨
桃五　夏雨
虫山　南石
秋河
自々

夕さよぬきぬ雲やきる白
さつき雨やこゝろ方も
燒の間てのこゝるや金の恵
初春をかるや俳世の春のこゝ
鶯と我と杖の初日を
よき扇や桂も雪て仮まこゝ
春風の涼も雪めて二日

四山
桂堂
芳山
六門
桂雪
桂花
遠流

落かける橡中途にとまれけり　四端
戸口まで萩も明るし稲の花　為山
迎ひせし君なき宿の落葉かな　卓郎
花の奥傘にも濃る山茶花　芝角
霞みつゝ奥に入る枯野かな　随て
枯にまた八日の月に水仙花　米山
春ときめぬ織女の香や二日月　岸少
鶯や日のさしこむ落葉かな　得甚
鶴の来て足洗ひけり藁屋し　乙外
山の香を葉毎の露や松かげり　松什
夕日の影も日の出に静かなり　山外
それとても遅し鶯花見し　自村
永き日の帆影や明けて空の藤　竹居
名は忘れてきくめのうはきのうち　諸篇
香にふれてなまじまるはなみ小　祖人
きつ鳥若葉も来きる雨若かな　古山

傘も行々日のうつ雛月は　水壺
京中の水音絶ておぼろ月　山子
猫の恋追ひし縁の足の跡　山方
風にちる夕日のかげや芥子の葉　雲茶
燕にぬくき日さしや藤の蔓　重年
蚕又入や母もかはる力わざ　為明
植ゑるも苗もし一枚二枚かれ　万古
西に山行けえたの行きける　一乞
木の葉ちる栄螺つき作り小松引　永て
門松や雪さきさきも見えし江　魯人
大名の相風もくぬの江これ　萬翁
人待や木挽のきくかうきは　雇翁
芦や畑ハ何見し江戸の春　一室
黄鳥や荒るにかりし遠く滑　桐古
芽の遅き木は霧にも赤かけり　為香
松に居て相さらく鶯や小子の月　都柳

水にうえて言る白このきるる柳小
伊のさ江川を見てく見る
荊のる色をこてしの命多く
葉のてよ見も難多つ植九
毎しるも指力行る葉葉小
仏くまきまるる紅白九
踏分るよ乃ハ老この孔妻のう世
造近を見てこのもるや峰の風
磯ア見てしるもかしまつ霧
さ伊や苏ハうきて苏の角
きく人の行うて初翁行う江
中くよあき塔や井の植
香ハ見よこのそて咲や稲寿子
乗星を見送る色の色う九
初蓋を見ぬも一りの家牧小
妻白や 菜園四五枚四面寺

一 一柔 紅白
考伝 風子
巴童
由誉
丁和
抱儀
秋香
彼野
雄古
般栄
一 白
水 水
二 対
外

の行きや 森もいきる厚之香
柳より筋この家の建場の九
生妻を相の指もこの江のう
生と先て行うて海る之独家
伊水のさてぬるむや池の水
蔦九や小妻うは乃ぬ文
小妻や くくいもまくぬ重九
蓋もるき人よ与久重 保
見勝まよ陳 るいく柳九
石の中や ぬるもてえて蔦留
押やし枕よ寿うう豊の塚
永きるも夕蓋の行う角田川
栄伝むや 照う墨うも使き蔦き
樫をえて菜人りる雅う柳
一りの葉のえれも家中霜の蔦
のるるの白まくや妻の書

自多 乗仏 仙竜 松水 稲青 五雅 伸中 保久 屋石 海豊 多我 惟子 英烏 板屋 黄乃 画雄

右ちらして家をつくれば林うれ
梅のうへ植つるもをかしなる女ハ
身の程を思ひて菊をやはの白
あめうへて柿の芽ハ
身をもてるもいとをかしなる時白うれ
芋をうゑるもやはをかしなるものの
ゝをもへ秋の月を
笠縫の諸菊をよしてうゑる
花をよろこばしてゝをもの長秋を
つ美をく四枝を絞して
朝ゆふをとゝ一時の時ハ初り新

花の枝打る事をよるをのきハ

拘邦
松宮
紅梅
牛梅
柚笠

西行

青好